

# H O T L I N E



底抜けに明るい学生たち

COSTARICA 青年海外協力隊 OOB  
 門松幸則

現在、青年海外協力隊 OOB として再び任国であった中米コスタリカへもどってきています。さて、「くまもとの風」のコスタリカでの利用法。  
 首都サンホセよりバスで約四十分、カルタゴ市郊外のコバオ実業高校のグラフィックデザイン科でパソコンの講習会を開く機会を得、日本の雑誌のデザインを参考にしたいという先生と学生の希望にこたえるため、毎号美しい表紙が掲載される本誌を贈りました。高品質の印刷物が簡単に入手できる日本と違い、参考書も少ないコスタリカで本誌に触れるとさらに価値がでてくるようで、日本語がわからない彼らですが、字体・レイアウトなどが参考になると喜んでいました。

完走を目標に各地の健康マラソン行脚をたのしんでいる。(あややめようかな)ここまで来て走るっきゃないが、自分らしくないぞ重い気持ちのままキロコースのランナーになった。スタート前の異様な雰囲気はすっかりビビってしまい、レース選びをしなかつた自分を深く反省。  
 励ましながら並走してくれる主人と、私のうしろにピタッとついて来る県警車。走ろうと主催でもあり、カメさんマークに親しみさえ覚えていたのになあ。  
 ※熊本県は健康マラソン発祥の地。遅いあなたが主役です。有名、スローランナーでも歓迎される大会が多いことで好評です。  
 上益城郡 白鷹民子

## さわやか〜ぜ

### 愛読者募集

県では、県政広報紙 KAZE (くまもとの風) の愛読者を募集しています。「くまもとの風」は、くまもとの新しい動きやユニークな人、県下各地の催物などを、写真やイラストを織り混ぜてお届けする広報誌です。あなたも、この機会に「くまもとの風」で素敵な出会いを体験してみませんか。

■発行/偶数月発行 年6回 ■郵送料として/1,500円(郵便切手をお願いします)  
 ■お申し込みは/〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号 熊本県広報課「くまもとの風」係  
 ご希望の購読開始時期(偶数月)をお書きお寄せ下さい。



### お便り募集

みなさんの身近な情報(出来事・季節の変化・風景・感想など)を200~400字程度にまとめてお送りください。  
(採用された方には「風」テレホンカードをプレゼント)



●あて先  
 〒862 熊本市水前寺6丁目18-1  
 熊本県広報課「くまもとの風」係  
 ☎(096)382-9780

たくさんのお便りをお待ちしています。

## 編 集 後 記

県政10年を振り返ってみました。時代の流れは速く、国内では着実な経済の成長、高度情報化社会、価値観の多様化等、大きな進展を遂げてきました。本県におきましても、今日と将来を築く重要な動きが枚挙するにいとまがありません。着実にあらゆる分野で進展し、熊本のイメージも上位にランクされてきました。21世紀に向け、益々、県民一人一人の満足度が高まっていくこれからも頑張りたいものです。

### ●表紙イラスト 阿津坂雅弘

表紙のことは  
 ここ数年の間で熊本にもずいぶん新しい建物や施設などが増えてきました。21世紀への大きな胎動を感じる反面、失われていく物への懐古的な寂しさを少し感じたりもします。

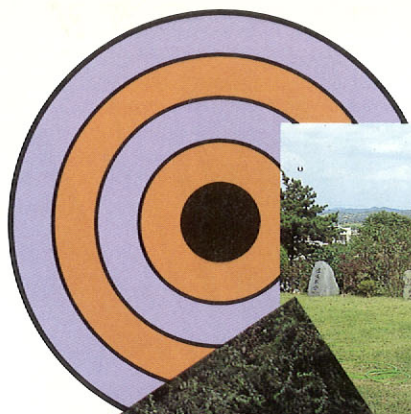
### ●シーン91 撮影のことは 長野良市

ギリシャ建築を思わせる、丸い石柱の隊列、本殿へ道引きするかのような電球の配列。  
 神社改装の時、現代のデザインを受けた地区住民の方々に拍手喝采。



### 姜信子さん

フリーライター。ノンフィクション「ごく普通の在日韓国人」で朝日ジャーナル賞受賞。  
 熊本と韓国との交流推進のため、韓国・忠清南道庁に県職員として初めて派遣された夫とともに一昨年5月下旬に渡韓。



韓国の弓道場



韓国の弓道風景

## 私たちはいかにして弓道を始めたか

韓国に来た当初から、夫が韓国の弓を習いたがっていた。日本の弓の半分くらいは大きさが、的は一四五メートル先にある。飛んでいく様は見えていて痛快だ。ところが、周囲の人に聞いてもどこで誰が教えているのかわからないうちに時

間だけが流れていた。  
 まだ風が冷たい三月の初め、市内に買い物に出て、軽い昼食をしようと、私と娘はソニンシン堂に入った。ソニンシン堂は、大田で一番おいしいと言われているパン屋だ。  
 私と娘が日本語で話していると、隣のテーブルでサンドイッチを食べていた女性が日本語で話しかけてきた。「もしかして、テレビに出たことはありませんか?」韓国に来て早々の頃、一時間のドキュメンタリー番組に私達一家は出演していた。  
 夫の留学に伴って5年間日本で暮らしていた。留学先は私の出身高校の近くにあって都立大だった。今は日本語通訳をしている。そんなことを話して彼女は最後に名刺をくれた。ユン・ジョンスクと書かれていた。  
 その一週間後、日本の新聞記者が大田に取材に来ることとなり、通訳を探しているという話に、私は受け取った名刺を引っ張り出して電話をかけた。それから付き合いが始まった。  
 ユンさんの家に初めて遊びに行った時、そこで私を待っている人がいた。ユンさんの友達のエ・ジュンスクさんだ。話

を聞けば、中国語学院の院長先生だという。韓国人なのだが、中国人に混じって通った華僑学校で身に着けた中国語は本物だ。そこで、ユンさんと私はイーさんから中国語を、私達ふたりはイーさんに日本語を教えるという話がまとまった。  
 もともと中国語を習いたくてたまらなかつた私には、降って湧いたようなラッキーな話だった。  
 交換授業のために週に一回、イーさんの学院に行く。すると、学院の若い先生たちも日本語を勉強したいと合流してきた。もう、学院ぐるみみんな友達だ。  
 こうなると、特に用がなくても側を通れば学院をのぞき、雑談をするようになる。その雑談の中でポロッとひとりの先生がこう言った。「七才の女の子が通ってきているんだけど、その子のお父さんは弓道の先生なのよ。」ここからは展開が早い。一週間後には大田の公設運動場にある弓道場へ入門の挨拶をしていた。十二月の最初の土曜日だった。  
 私が学院の先生から話を聞いたその日、奇遇にも夫は「韓国の弓道」という本を買っていた。  
 こうやって人はつながっていくのかと思えない思いにとらわれた一件だった。



# 우리는 어떻게 해서 공도를 시작했는가



扶餘国立博物館